紹介

●列國史叢書　伊太利史

大類仲　平塚博　共著

すでに數卷を公にした列國史叢書の一卷として新にこの伊太利史が公にされた、東北帝大教授大類博士、同講師平塚學士の共著になつてゐる。全卷は五章に分たれ、第一章中世伊太利、第二章文藝復興時代、第三章衰退期の伊太利、第四章伊太利國家復興、第五章現代伊太利となつてゐる。こゝには一讀して氣の付いた二三の點について述べる事とする。

考づ內容について見るに、第一章中世伊太利の章には古代世界の崩壞よりルネサンス迄を取扱つてゐるが、この章に於て注意を引くのは「羅馬」の歷史的意義なる一節であつて、その中に「蓋しローマは其の空間的重要性即ち地理的經濟的に重要な地點とは別に、ローマ人が時間の中に築き上げた偉大な功業即ち世界國家の起源であるのみならず常に巨大なる力の發源地として殘り、自らこの都には偉大なる統合の生命が宿ると思惟されるに至つたからである。」(一五—六頁)と述べられてゐる。かゝる羅馬觀念を正しく認識する事はイタリヤ史を理解する上に最も重要な事なのである。羅馬觀念そのものは西歐人全般にわたつて多かれ少かれ懷れる共通觀念ではあるが、イタリヤ人にとつては最も根强いものであり、彼等にとつては過去の羅馬の榮光は取りも直さず自らの祖先の榮光なのである。即ちイタリヤ史に於ては「羅馬」を忘れる事は出來ないのである。かゝる點より見て今イタリヤ史叙述の始めに當つて羅馬の歷史的意義について述べられてゐる事は極めて妥當であると思ふ。次に第一章に於ては政治、社會、文化方等面に觸れられてゐるが、たゞやゝ物足らぬ感をいだかせる事は、神聖羅馬諸皇帝特にシユタウフエン諸皇帝の伊太利政策とイタリヤ史との關係についての叙述があまり簡單すぎる事である。この點についても中世後期の一部中に觸れてはあるが(四二頁)それはたゞフリードリッヒ一世の場合が簡單に述べられてゐるにすぎない。紙數の制限もあることながらこの伊太利政策によつてイタリヤは種々の影響を受けてゐる事によつても、又この政策が神聖羅馬諸皇帝の懷く羅馬觀念によるものとすれば羅馬觀念の歷史的意義の一つとしても少し叙述せられた方がよくなかつたかと思ふ。

第二章文藝復興時代は、伊太利諸國家の形勢、國際紛爭渦中の伊太利、文藝の復興、新學問の發生・發達、新興美術の諸節に分れてゐる。これによつてもわかる樣にルネサンス時代を各方面にわたつて述べられてゐるのではなく、主として政治、社會、文藝、學術について述べられてゐるのである。而してそれは誠に手ぎはよくまとめられてゐり、しかもそれには大類博士のルネサンスに對する深い理解が隨所に示されてゐて興味深い。ルネサンスについても結局「ルネサンスは文藝上の復興運動であるだけそれだけイタリヤ的な運動」(一二七頁)であり、ルネサ

ンスには「自由」の精神と共に「調和」の精神が濃厚で、「イタリヤ的であるだけ、文藝の『調和』にも又『不徹底』にも秀れた美しさがある。」(一三三—四頁)と説かれてゐる。かくしてルネサンスと宗教改革とは別箇の運動と解釋されてゐる(一五八—九頁)。ルネサンス運動が結局イタリヤ的であるとするこの考へは、ルネサンスの正當なる理解にとつて重要なる事と考へるが、たゞこゝに述べられてゐるイタリヤ的といふ意味はイタリヤ人の持つ特性といつた樣なものを意味してゐる樣に考へられる。イタリヤ的といふ意味には以上の如きイタリヤ人の特性によるものもあるに相違ないが、尙この他にブルツクハルトが「何となれば古代とは彼等の偉大さに對する思出に他ならぬのであるから」と述べてゐる如く、イタリヤ人の懷く羅馬觀念を重要視する事によつてイタリヤルネサンスの運動が他國のそれとは趣を異にし、イタリヤ獨特のものであるとの意味にも解釋出來はしないだらうか。ともあれルネサンスの章には所々に秀れた見解が示されてゐて興味が深い。

第三章衰退期の伊太利はルネザンス後リゾルジメントに至る期間であるが、その第一節反動宗教改革時代の所はルネサンスの叙述と共に興味深く讀める。反動宗教改革時代とはバロツク文化の時代に當るものである。從來バロツク美術に關しては、これを完成せるルネサンス美術の荒化せるものとして長い間學界より輕視されてゐたが、これに對してウイーン派の美術史家達は Kunstwollen の主張によつてバロツク美術にも獨自の意義を與へるべきを主張したのであり(Riegl; Dvorak 等)、以來バロツク美術は學界の注目を引くに至つたのである。以上の如き美術史に於ける主張はバロツク文化全體について考へる場合にも重要であつて、バロツク文化の歷史的意義を理解するには、ウイーン派の人々が美術史について考へた立場を一般文化に擴充して考ふべきが至當であらう。本書の中には「バロツクは眞の美的見地よりすれば墮落と見られる嫌がある。……併しバロツクは其周圍や時代との大なる連關の中に置いて考察せれば其眞の意義と價値とを理解し得ないであらう。此點よりして歷史家は斯かる時代の藝術により多くの興味を感ずるかも知れない。」(二二〇頁)と述べられてをり、反動宗教改革とバロツク藝術なる一項目中にはバロツク藝術の持つ歷史的意義が說かれてゐる。先に述べた事よりしてもこの見解は正當であると云へよう。これと共に今一つ注意を引くのはバロツクと羅馬との關係についてゞあつて、バロツクと羅馬が不可分離にある事を述べ、「ルネサンスに於ける古代ローマの復興は樣式上に於てこそ之を云ひ得るが、完全なものでなく、精神をも包含し種々なる意味と結びつけて、古代ローマ文化が近代的意味に於て復興したのはバロツクと云ふ事が出來るであらう。」(二二一頁)と說かれてゐる事である。こゝにも羅馬の傳統の意義が重視されてゐるのに注意される。而してかゝる點よりしてこの反動宗教改革時代の所は興味深く又示唆に富んでゐる。

第四章伊太利國家復興、第五章現代伊太利の章については十

九世紀以降の複雜多岐なる歷史經過のため簡單すぎる所もあるが大體一通り述べてをりムツソリーニ治下の現今イタリヤにまで及んでゐる。

以上は內容についてゞあるが、次に體裁について見るに卷末に附錄として參考書目を擧げてゐる。これには特殊な專門的なものは省かれてゐるが、一般的な基礎的な良書、良論文をあげ、簡單ながら解說を付してゐる事は親切なやり方であらう。書籍の選擇も少いながら當を得てゐる樣である。尙この他數葉の寫眞とイタリヤ地圖一葉が挿入されてゐる。

要するに、本書には望蜀の感を持つ箇所もあるが、全體を通じてイタリヤ史に關するまとまつた概說がなされてをり、更にイタリヤ史に於ける羅馬の意義に對する認識及びルネサンス、バロックを始めイタリヤ史全般に對する深い理解は、列國史叢書てふ一般的入門書である制限の中にあつても尙隨所に認め得るのであつて、かゝる意味に於て本書はイタリヤ史へのよき手引きであり、又その理解を深める上にも益する所大なる事を信ずるのである。（四六版本文三五七頁、附錄一五頁、三省堂發行、定價貳圓參拾錢）（鹽見）

●現代の世界史　　時野谷常三郎著

吾國に於ける西洋近世史の泰斗として既に定評ある著者は本書に於て、「現代世界の政治思想を中樞として一般政治史の概觀」を試みられた。複雜多樣なる現代の諸現象に於て政治的文化現象程に顯著なるはないであらう。著者は此複雜なる政治的諸現象を現代の世界に於ける政治を一貫するとみられる民族主義と世界主義並に民主主義とに關聯せしめるによつてその歷史的意味を求められたのである。著者が本書の序文に於て「吾が『現代の世界史』も亦此現實の生活を觀るに、成るべく過去の世界によらしめ、過去の世界を推すに、此現在世界の動向に依らしめやうとする」といはれて居るは、決して現代世界の諸事象を因果的又は有機的連關に結合せんとするのではなくて、前記の政治的傾向を通して諸事象を觀、それの顯現とするによつて其れ等の事象の特殊的意義を究明せんとの意を表明されたものと推察されるのである。

本書は全五章、二十七節よりなり、民族主義と世界主義との意義とその歷史的發展をたづれ（第一章）、世界大戰のよつて起りしゲルマン、スラブ、ラテン諸民族の民族主義の發展を叙述し（第二章）、大戰後世界各國に澎湃として勃興した民族主義の運動を概觀し（第三章）、更に大戰後各國內政上に支配的なる傾向といふべき民主主義の發現を叙述し（第四章）、最後に前後六年に涉る大戰の反動として起りし平和思想、國際協調主義の發展について、グロチウス、シエリー、カント等の國際協調主義、平和論の思想的發展をかへりみ、國際聯盟の成立とその變遷について論述されたのである。本書は菊版二八七頁の書であつて、以上の諸事象について一々詳細を期することは出來ない。併し複雜なる諸事象に內的統一を與へて一貫せる歷史叙述に經